

カジユエロ町のサントス [I]

永井竜造

一人の日本人がいた。彼の人格は、先祖から受け継いだ遺伝子と、戦時中の様々な体験によって形作られた。父の「大陸で生きなさい」という遺言に導かれ、彼はブラジルへ。そこで生涯の伴侶を得、エメルルド鉱山の発掘という日本人が現地で行ったことのない事業を起す。そこでの現実には先の大戦を生き抜いた彼をも驚かせることの連続だった。

真吾の父方の祖先は、九州に起源する大陸に備えた防人であった。

人は祖先から受け継いだ遺伝子を軽視しては、その人を語れないのかも知れない。

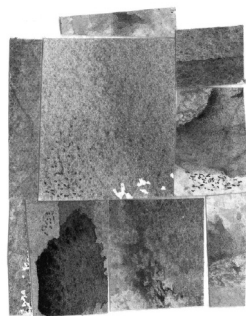
自身をよく見つめてみると、こんなところまでと驚くほど先祖に酷似していて、これこそが本当の自分だと言いつ

れるほどの新しいものは残念ながら何一つ見つけれられない。父方と母方のそれぞれの先祖の素質を形成する遺伝子をそれぞれに処に正確に受け継いでいることに、ただ驚いてしまふ。

「私は先祖を意識する都度に、自分が祖先の復活人間だと思っていた。いまでは、受けた命を嬉しく思うようになった。さらに、復活人間としての生涯に興味津々で、楽しみながら、本気で生きるようになった」

誰にも話さなかったが、内心から復活人間だと信じていた真吾は、振り返って見ると、遠い祖先を想いながら、現実の生活では、近い風景と目の前に発生する現象に拘りながら生きていて、遠くを見ることを忘れていたのだった。

遠くとは、遠い風景と過去と未来を見つめることだった。



このことが理由となつて、真吾は生きる姿勢を変えたのだった。

戦時の真吾には、数え歳で四歳から五歳までの記憶が、所々、プツンと途切れながらも脳裏に焼き付いて残っていた。

「私の記憶は、刺激的な会話だけははつきりと覚えてい
るが、風景と人物は、彩色がない白黒写真が時系列なく記
憶と記憶の間が吹き飛んだスライドのように、一枚ごとに
区切れている。この途切れながらの記憶でも、伝える責任
があるだろうと考えて、戦争被害体験、戦後生活、その後
の復活を腹から吐き出してしまおうと思つた」
人間としての反省……人間であるがための畏れ……人間
としての祈り……。

(一)

太平洋戦争と言われた戦時を危うく生き残つた。

真吾は、大陸で生きる宿命を担つて五十歳を超えるまで戸惑いながら生きてきた。

「私の年齢が戦争の被害体験を記憶する最後になつた。
私より後に生まれた人々には戦争の記憶が全くなかつた」

真吾の父は、新京（長春）の満州中央銀行、秘書課の一

等通訳として満州に渡つた。

満州国皇帝愛新覚羅溥儀あいしんかくらふぎとの対談の通訳が約束であつたのに、父に与えられた仕事は航空機で偽札をまき散らして中国経済を攪乱する役目だった。

父は仕事に不安を覚えながら、やがて嫌悪して退職したと、母から繰り返し何度も聞いた。

*

父が満州中央銀行を退職すると、追いかけるように召集令状（通称・赤紙）が届いた。

父は母と向かい合つて正座し、召集令状を母の前に差し出した。二人の間には和紙があり、その上に父の頭髮と爪が置かれてあつた。父が和紙で頭髮と爪を包んで母に手渡した。

その夜、真吾が母に手を引かれて酒宴の席に座ると、父は友人であつた三人の客を前にして、真剣を手にして詩吟を唄いながら剣舞を舞つたのだつた。

剣舞が終わると、父は正座して真吾の両手を強く握り絞めて、厳しい表情で、「大陸で生きなさい」と言つた。この一言が脳裏に焼き付いて、後に父の遺言となつた。

母には「内地（日本）に帰りなさい」と、父は優しく諭すかの表情で話していた。

*

昭和十九年初春、出征した父が予約した引き上げ船に乗船するために、母と真吾、弟の三人で満州鉄道に乗車すると、客車は総て満員で、真吾は座席の上の網棚に乗せられた。

列車を降り、母が必死の表情で歩く姿を時々見上げて、冷たい風に追われながら港に着いた。ところが、母は弟を背負い、右手に鞆を持ち、左手で真吾の手を握りしめて、胸には荷物を入れた袋を下げていたので、歩くのに手間取り、予約船が目の前で出港してしまった。このときの母の落胆した表情を忘れられない。

幸い後続船に乗船でき、昇降タラップをやつと登り、しばらく過ぎた時であった。

警告音が響き渡り、

「救命具を付けて甲板に出ろ！」

乗船していた軍服姿の兵士から命令が伝えられた。母が弟を背負い、真吾には救命具を付けさせようとしたが、救命具が大きすぎて付けられなかった。それを見かねた中年男性（六年後に一度だけ再会した男性は、農林技官であった）が、真吾を背負ってくれたのだった。

甲板に出ると、警報は、父が予約してあった引き上げ船が潜水艦に撃沈されたことを知らせるもので、付近にいるはずの潜水艦を警戒して乗船者たちの表情が緊張で固まっ

て見えた。

真吾は、船の横を二頭の鯨がすれ違いに泳ぎ去って過ぎるのを見つめ続けていた。

*

昭和十九年八月三十一日、河南作戦の川岸中隊に従軍していた父が、三十五歳で戦死した。

千歳区の寺で戦死者の合同葬儀が行われた。真吾は家族の代表者として父の遺骨箱を受け取ったが、白布に包まれた木箱はあまりに軽く、胸に抱いた途端に、中どころろ音がした。この中に父が居ると教えられても信じられずに、帰宅して仏間に置かれていた遺骨箱を、誰にも見られないようにそつと開けてみると、指ほどの骨がひとつだけ入っていた。

真吾は、父が死んだのは嘘だと思った。その後八年間、父が突然帰ってくると信じて、日々父の帰りを待ち続けた。

当時は家長制度が残っていて、父に代わって幼い真吾が家長として付近の家々の祝儀、葬儀、隣組の会議、さらに菩提寺の檀家との付き合いをしなければならなかった。

*

父の実家は、静岡県の大井川が駿河湾に流れ込んだ河口にある静浜しずはまの海軍航空隊基地の近くだったので、真吾は連

日、空に白い毛糸が絡み合ったような空中戦を見上げていた。毎日響き渡る富士見平頂上の監視塔からの空襲警報のたびに避難して防空壕に逃げ込んでいた。

初夏のある日、真吾が防空壕の内で尿意を覚えて外に飛び出し、庭のトウモロコシ畑で小便をしながら、空を見上げると、白く見えた爆撃機が旋回していた。用を足し終えて再び空を見上げると、爆撃機が消えていた。その瞬間、爆発音とともにトウモロコシが根元から吹き飛んで暗闇になったのだった。防空壕からわずか十数メートル先の大石さんの家に爆弾が落ち、深さ三メートル、幅が一〇メートル程のすり鉢型の大きな穴ができて、家がなくなっていた。真吾の家を見ると戸や障子が爆風で吹き飛んで、向かいの小林さんの家の裏庭まで見えていた。

近所に暮らす縁者の二軒は、柱が倒れて藁屋根が地面を抑えたように見えた。その藁屋根から、藁を掻き分けて娘たちが這い出してきた。

その一瞬だった。真吾の頭上の屋根をかすめて空気を裂く轟音がして、再び爆撃機が富士見平を登るように上がっていき、頂にあった監視塔を爆撃した。真吾は瞬間に爆撃機の操縦士を見た。

さらに、富士見平の頂を降った所にあった町役場の防空壕を爆弾が直撃し、避難していた全員が死亡したのだった。

一連の空襲で親戚の幼い子も爆死した。

その夜、再び空襲警報が響き渡り、慌てた真吾は、鬼岩寺の門前を流れる矢川の排水溝の土管に潜り込んだ。その時、矢川橋を渡って避難する老いた男の人が叱り付けた。

「土管に隠れていては危ないぞ。山に避難しなさい」
叱られて菩提寺の墓地を登って、富士見平の茶畑に逃げ込むと、機銃掃射を受けて、防空頭巾を破った真吾の脇を曳光弾が走り抜けた。

*
藤枝町の原区に戦闘機の部品工場があつて、爆撃機が度々飛来した。

ある日、空中戦があり、瀬戸川の土手に爆撃機が墜落した。みんなで墜落機を見に行くと、女性兵士の上半身と脚が散乱して死亡していた。蠟人形と勘違いしたほど肌が白く透き通っていた。

真吾は爆撃機の風防ガラスの破片を拾って帰り、一センチ程の厚さの破片をいろいろと弄り回していると、知らなかった新しい良い匂いがした。さらに、その破片を板に擦り付けると、強い香水の匂いが回りにまで広がった。

真吾は、陶醉するような香りを感じた。

*

静岡県清水町が潜水艦の艦砲射撃で焼け野原になり、

縁者の家族が疎開してきた。

従姉妹が顔、腕、右足に火傷を負い、腕と脚の焼けただけ、
れた傷口から蛆虫が這いまわっていた。

幼い真吾の役目は、この蛆虫を箸で摘まんで取ること
だった。

*

最も深刻だったのは飢餓であった。真吾の全身に栄養失
調から腫物ができた。

親戚の縁者が、「真吾は助からないだろう」と、ひそひそ
話しているのが聞こえた。葉さえもなく、今でも腫物の
傷跡が残っている。

*

日本国民が戦争に勝つと信じている時期に、真吾一家は
戦時中の引揚者だったことから卑怯者の誹りを受けて、近
所の人々の冷たい視線を浴び、付近の子供たちから「チャ
ンコロ」と蔑まれていた。

この屈辱感はいまだに脳裏に残ったままであるが、これ
らの体験が真吾の、自分のことでは泣かない、決して涙し
ない、人種差別を徹底して嫌悪する精神構造を形成した原
点となったのだった。

*

母の実家が山梨県甲府市にあって、空襲があったと知っ

た母が真吾兄弟を連れて東海道線の富士駅から身延線みのぶで南
甲府駅に到着すると、甲府市内が総て焼け落ちていて、商
工会議所だけしか残っていなかった。南甲府から甲府駅の
先まで見渡すことができたのだった。

母の実家は、一メートル程の高さの鶏小屋のようなバ
ラックがあっただけだった。敷地だけが広く見えていた。
焼夷弾が雨のように落ちてきて地面に次々に突き刺さると
一面に火を噴いた、と生き残った祖父母が真吾に話して聞
かせた。

夕食時間になると祖父泰次郎が、焼け焦げた板の上に焼
けた缶詰の空き缶を五個だけ置いて、茶筒の蓋をそっと開
け、木製の匙で何かの粉を三杯、それぞれの空き缶に分け
て入れた。お湯を注いで箸でかき混ぜて、「さあ、食べなさ
い」と言う。真吾はその異様に見えた食べ物芋粉だと聞
かされて食べたが、味がなかった。

陽が沈むと周囲が闇に包まれて、祖父から、鶏小屋のよ
うなバラックの中に作られた二段の棚で寝なさいと言われ
た。真吾は上の棚で寝たが、朝陽で付近が明るくなると祖
父から呼ばれて、敷地の裏を流れるどぶ川で、ザリガニ釣
りを始めたのだった。数匹を釣り上げて、空き缶の中で茹
でると、ザリガニが朝食に添えられた。食事が終わると祖
父と食料にする蛙を採りに行った。真吾は家に帰りたく

なっていた。

静岡では甲府ほど食べ物に困っていなかった。母もおそらく同じ判断をしたようで、その日、身延線で帰宅したのだった。

藤枝では、南瓜の葉や茎も煮て食べていた。子供たちの役目は、水田でのツボ拾い、小川で雑魚取り、野草摘み、シミ取りなど、食べられる物をなんでも集めた。

そんなある日、真吾は母からヨモギ草とオオバコ草を採っておいでと言われて、野道に竹籠を持って歩き回ったが、食べられる野草は誰かに採られていて、見つけるのが難しい。すると近所のメソジスト教会の周りで、ヨモギ草を沢山見つけた。竹籠がヨモギ草で一杯になり、喜び勇んで帰宅して母に渡すと、「真吾、これはヨモギではないよ。菊だよ。食べられないから捨てて来なさい」と言った。あとで、気落ちした真吾を母が優しく慰めてくれたのだった。

*

橋の両脇の鉄管が切り落されて、供出が始まった。真吾たちは松脂まつしじを集める役目だった。松脂は戦闘機の燃料にするのだ。

昼間、空中戦がなかった。空には木製の練習機（通称・赤トンボ）が四機飛んでいた。しかし、夜になると、空中

戦が始まった。夜空を見上げると、爆撃機を、日本の戦闘機が二機追いかけていたが、戦闘機が近づいた時だった、爆撃機が瞬間に轟音を出して、あーっと驚く間もなく戦闘機を置き去りにして、遠く離れたのだった。

真吾と一緒に見上げていた右隣家の杉山さんが悄然とした表情で話した。

「あーあ、敵の爆撃機にはロケットとかいう仕掛けが付いていて、日本の戦闘機が追うとロケットで簡単に逃げるそうだ」

大きな溜息をついていた。

*

広島、長崎の町が新型爆弾で全滅させられたとの情報がすぐ藤枝にも伝わってきた。被爆の噂は、「マッチ箱ほどの大きさの爆弾で町全体がなくなった」という話だった。恐ろしくて身震いが続いた。

真吾は、真空管が三本のラジオに耳を近づけて、大本営発表のラジオニュースを聴くようになった。各地の戦闘で日本が勝った放送ばかりだった。総ての家では、裸電球の周りを黒布で覆い、灯りが家から漏れないように警戒している、何処の家にも防火水槽が置かれてあった。

*

昭和二十年八月十五日、終戦になると父方の親戚縁者た

ちが藤枝から去っていったが、何か問題があると、父方親族と母方親族に分かれては親戚会議をするのが当時の習慣であった。戦死して残された妻は未亡人と呼ばれて、行く末を父方の親戚会議が当然のように決めていた。未亡人となった戦死者の妻は、父方の兄弟で独身者に嫁がせるのが当時の常識であり、兄弟で独身者が居なければ、父方の縁者から独身者を探して嫁ぎ先を決めることもあった。

ところが真吾の母は、自身の今後を自分で決めようとして、父方の親戚会議の決定を総て拒否したのだ。その母の態度と父の戦死が原因となって、父方の縁者とは終戦を境にわずかな期間で縁切れとなってしまったのだった。

終戦直後は配給制度で、一日に大人が一合五勺分の食料配給で、芋類、麦、小麦粉。やがて数年が過ぎて、外米、黄変米、人造米、穀物類に改善の兆しが見えだした頃に鯖の配給があり、食べた者は全員中毒になり、唇が三倍ほどに腫れた。何よりも酷かったのが栄養失調と肺結核で、付近の人たちが次々に死亡していった。

さらに、自殺者も増え続けた。真吾は、墓地の樹の枝から首つり自殺していた男の人を目の前で見た。その姿の醜さ、悍ましさ^{おぞ}に恐怖した。その墓地は彼の祖先の墓地に相違ないと思った。彼が本当に必要とする先祖の墓に戻ったのだ。

東海道線の座席下に潜り込む、親を亡くした戦争孤児たちや、家を焼失し家族を亡くした放浪者たちが、上野駅の地下道で暮らしていた。

さらに、戦争で腕を失った人、脚を失った人、失明した人、顔に傷跡が残った人、街角にいる白衣の傷痍軍人たちの物乞いする姿に、戦時を生き残った母と真吾は、正視できない惨め感に襲われた。

何故、戦争をしたのか。何故、戦地に行かなければならなかったのか。幼い真吾にも強烈な印象として脳裏に焼き付いたままで一時も忘れることができない。

真吾が数え歳で六歳の時、父方の親戚会議で、清水港近くの三保の歯医者に養子に行くように決められた。父方の長女の叔母に連れられて到着すると、真吾はその時から二日間、食事を拒否した。そして三日目の朝、養父母が見ている前で、真吾は庭の土を食べて見せたのだった。

「この子は、きつと、頭の狂った馬鹿だ」

口を揃えて話しながら、慌てた養父母は真吾をその日に藤枝へ戻した。幼い真吾の将来を親戚会議が決めてしまう縁組に必死で抵抗したのだった。どんなに貧しくても家族と一緒に暮らしたかった。

これらの事実は後に、ひたすらな平和への祈りに変わっていった。

真吾は、無慈悲に生死を分ける絶望的な現実を、七度も死線を越えて偶然にも生き残ったのだった。

(一)

昭和二十二年の夏頃だったと思うが、祖父から、母の兄が復員したからと呼ばれた。母と甲府を再び訪れると、敷地に新しい家が建っていた。既に親戚が集まっていた。姉妹弟から嫌われ続けてきた真吾の叔父源太郎が生きて帰還したと、みんなが大騒ぎしていたのだった。

親戚の人たちの話によると、「若旦那と呼ばれた白色の衣服がよく映える母方の叔父源太郎は、若い頃から酒と女と博打の道楽の三拍子が、すべて常識を超えていた」とのことだった。とびきりの道楽者で、よく母親と女房を泣かせていたそうである。

叔父は好きな人に貢ぐのではなく、女性たちを手当たり次第に喜ばすのが好きだったそうだ。それに、朝起きるのがずば抜けて早かったようで、家族が寝込んでいる間に親の製造卸売りの店から手当たりしだいに売り物の家具、木製調度品、箸を持ち出すのだそうだ。これを兄妹の相模原の叔母が、ある日、早朝にたまたま見たそうだ。黒を着こなす洋装の好きな叔母は、ことあるごとに皆に話して聞か

せた……。

その時の叔父は、夜の明けきれぬうちに、売り物の鏡台を店から持ち出すと、両手で大きな風呂敷包みを前に抱え、体を前後にゆすりながら、小股でスタスタと駆けた。周囲を気にしながら駆けるのだが、とても素早かったと、叔母の話はだんだんに講談めいて、身振り手振りを交えて、叔父を真似て見せるので、みんな益々おもしろがって、そのうち図に乗って話を終わらそうとしないのだった。

この叔父の甲府の家に親族が集まれば、いつのまにか居間での同じ雑談になった。縁者はそれが楽しみで、何があっても兄妹会とか何とかと屁理屈をつけても集まってくる。

この日も相模原の叔母の出番になった。講談じみていると思ったが、しだいに狂言のような味が出てきて、トントんと駆ける格好が、ますます面白くなってきた。「放蕩息子の一席」と題名まで用意してあって、叔父の道楽ぶりをなんと一時間も演じた。

その間の叔父はといえば、俗にいうところの苦虫をかみつぶしたような表情で、じっと叔母の手元を見つめているだけで、観念してしまっ、決して怒ったりしなかった。

叔母は調子づいて、その続きを演じてしまった。戦地におもむく道楽者の叔父の姿だった。